

カナダ日本語教育振興会

Newsletter No. 33

Canadian Association for Japanese Language Education

ホームページ : <http://www.cajle.net>

December 12, 2006

———— 目次 ————

◆巻頭言	
NHK スタジオパーク 見聞録	楊曉捷 1
◆年次大会	
2006 年度年次大会報告	谷原公男 3
◆新理事より	
小室リー郁子／下條光明／竹井明美／	5
永瀬治郎／ライリー洋子／ラム (畔上) 智子	
◆特別寄稿	
日本語を教える仕事	太田徳夫 7
エドモントン・オイラーズ	室屋春光 9
◆リレー随筆	
名前の呼び方 —— 発音は日本語？それとも原	
語？	西島美智子 11
日本文明を形作る神道	ライリー洋子 12
◆随筆	
日本語の本を楽しみながら	王伸子 14
◆活動報告	
活動報告とこれからの活動案内	清水道子 16
CAJLE 年史	清水道子、ラム (畔上) 智子 23
BULLETIN BOARD	大江都 24
編集部便り	25

CAJLE ホームページのアドレスは、2006 年 9 月から「.org」から「.net」に変わりました。新しいアドレスは <http://www.cajle.net> です。

巻頭言

NHK スタジオパーク 見聞録

楊 曉捷

夏の終わりにひさしぶりに一人で日本を訪ねた。わずか七泊のスケジュールで、二つの講演、一点の貴重資料の調査と、駆け足で五つの都市を廻った。CAJLE の皆さんがトロント年次大会に楽しく集まったころ、東京の渋谷界隈をぶらぶらし、蒸し暑い日本であれこれと思い出を作った。その中の一つをここに記してみたい。

滞在の最終日、旅行社の人が繰り返した楽観的な予想に反して、帰りたい日のチケットはどうしても手に入らず、おかげでなんの約束も入っていない空白の一日が出来てしまった。これといった目的もなのまま、とにかく新宿方向へと歩き出した。広い公園を横切ったところ、そこは NHK スタジオパークだった。ホットな日本の映像を毎日見せてくれる NHK だから、さっそく入場券を買って中に入った。でも、そこは子供づれや地方からの観光客で賑わい、私にはいささか場違いなものだった。一通り見て、出ようとしたところに、番組生放送見学の看板が目飛び込んできた。番組の名前は「スタジオパークからこんにちは」。見物客の中を歩いてゲストをスタジオの中に迎え入れ、二人のホストがゆっくりと話を聞くというユニークな番組は、学生時代の思い出にあって、それだけで懐かしかった。

番組のポスターを改めて見たら、ホストには有働由美子との名前が載っていた。あの有働キャスター

だ。「ニュース 10」のスポーツキャスター、メインキャスターを勤め、テレビ画面に毎日映っていたNHKの顔だった。日本の夜の10時は、カルガリー時間の朝6時か7時なので、毎日のように朝起きてはその日のニュースを見て、日本の出来事や話題を、ときには音声やビデオテープを携えて日本語の教室に持ち込んでいた。今年の春になってその番組が消えてしまったことは、残念でならなかった。テレビ画面の向こうにいるアナウンサーをこの目で見られるのだと、ときどきして見学の方法を尋ねた。放送時間より二時間前に申し込み、希望者が多すぎると抽選になるとのことだった。私のように時間を持って余した人はそんなにいなかったからだろうか、何の苦もなく見学の番号をもらい、スタジオ内にあるレストランで定食を取って、放送開始30分前にスタジオの中に入れてもらった。

スタジオの中では、放送まで3時間ほど前から十人ぐらいのメンバーのチームがずっと慌しく動き回っていた。有働キャスターはその中心に座り、台本を入念にチェックしていた。開演5分ほど前になり、二人のキャスターがまず現われ、観客、見学者たちに盛り上げるように指示した。男性の小川浩司キャスターは見学者に向かって、「一番遠くから来ている人は」と問いかけたので、迷わず手を挙げた。「カナダからの見学者までいるのよ」と、カメラがスタジオに切り替えるまでのほんのわずかな時間の中で、ゲストにまで紹介された。

その日のゲストは、前田吟さんだった。寅さんの映画に妹婿としてぜんぶに出演し、いま放送中の大河ドラマに出ているなど、まさに時の俳優なのだ。雑談のような形で番組が進み、しかもこんな長寿番組で勝手に知り尽くされているはずなのに、丁寧な準備

ぶりには舌を巻いた。与えられた席はちょうどメインカメラのすぐそばなので、カメラマンの手元の、ぎっしりと書き込まれた台本をときどき覗くことが出来た。すべての内容は台本通りに進み、ゲストも質問の内容を心得ていた。見たところ、一つだけの例外は、カラオケの話になって小川キャスターが「十八番（おはこ）は」と聞いて、それを歌ってほしいと迫ったあたりだった。ゲストは明らかに戸惑い、それを有働キャスターが円滑に助け舟を出した。ホストは二つぐらい用意された質問を割愛させられたらしく、プロデューサーと思われる人は、ずっと厳しい顔でボードに時間のことなどを書いて指示を出し続けていた。

一時間の番組はあっという間に終わった。ゲストが帰ってからは二人のキャスターが見学する人々に丁寧に話しかけた。そこでカナダから来た私のことが再び話題になり、有働キャスターは淀みなく英語で質問し、中国語で挨拶した。テレビカメラは止まり、撮影も禁止で残念だったが、今度はカナダから学生を連れて見学にくるとお応えし、いい思い出になった。

日本語の教室では、NHKの番組はつねに理想的な教材だ。一方では、著作権などのことで思うままに導入することができないのも現状だ。思えば現在の著作権のありかたとその発想はメディアの発展に伴っておらず、テレビ番組について言えば、もっとたくさんの人々に見てもらいたいという製作の狙いとは必ずしも一致していない。いつかはこのような状況に変化が起こり、日本と日本語に関心を持ち始めたばかりの外国の若者たちも、かれらの日本語の先生が選び、解説をつけた番組を楽しむことができるようになることを願ってやまない。

CAJLE のホームページ (www.cajle.net) は、随時内容の更新や新しい事項の掲載を行っております。特に、会員ネットワークのページの充実をはかっており、リンクを増やしました。カナダの大学や団体、また日本語および日本語教育に関する個人のサイトで、是非載せたい、というものがありましたら、西島まで (michiko@unb.ca) ご連絡ください。(広告担当西島・楊記)

年次大会

2006 年度年次大会報告

CAJLE2006 大会委員長 谷原 公男

2006 年度 CAJLE 年次大会は、トロント新移住者協会日本語教育プロジェクトの協賛で、8 月 25 日から 28 日の 4 日間、国際交流基金トロント日本文化センターを会場に開催されました。「日本語教育と生きた日本語」をテーマに、教科書では扱いにくい生きた日本語について、アニメやビデオゲームなどのポップカルチャー、言葉遣いの男女差などについて論議し、指導の際に何をどの程度、どのように取り入れていくのが、昨今の学習者の学習動機と学習意欲の継続に役立つかを考える場となりました。ここに、助成くださった国際交流基金、会場提供に加え全面的なご支援・ご協力をくださった国際交流基金トロント日本文化センターの皆様にご挨拶申し上げます。

今大会では、教科書から離れた発展内容を活かしていくには、やはり基礎学習も大切であるとの観点から、音声・アクセント指導の基本となる教師研修も行いました。また、従来どおり研究論文発表、懇親夕食会、日本語教材展示販売も実施し、教師の能力開発とともに、幼児から小中高生、大学生、一般成人を対象とする日本語教師が一堂に会し、情報交換、交流、ネットワーク作りに勤しむ場としても非常に充実した大会となりました。

今年度の大会は例年より 1 週間遅く 8 月最後の週末の開催となり、学期始めが近かったためか、参加者数は少なめで、合計 75 名（3 日間合計延べ 162 名）となりました。特に地元トロントでの日本語学校関係の催しと時期が重なったためにトロント地区からの参加者数が例年に比べ少なかったことが残念に思われます。しかし、その分アットホームな

雰囲気の中で内容の濃い大会を行うことができ、大会後のアンケート調査でも、好意的なコメントを数多くいただきました。参加者はカナダ、日本、アメリカの 3 カ国からで、うちカナダからの参加が 50 名と、3 分の 2 を占めました（日本からは 16 名、アメリカからは 9 名）。また、入会者も 20 名あり、うち約半数の 9 名がカナダ、6 名がアメリカ、5 名が日本からでした。

大会後のアンケート調査では、回収数 25 のうち、大会全般について、「とても良かった」 17 名（68.0%）、「良かった」 8 名（32.0%）という高い評価をいただきました。良かった点として、(1) バリエティーに富んだ盛りだくさんの内容で、とても勉強になった、(2) 機材などの準備がよく整えられていて、時間も厳守されていた、などが挙げられました。改善すべき点として、(1) 研究発表論文要旨集を当日配布するのではなく、事前にホームページに載せてほしい、(2) 研究発表の質疑応答の際、質問があまり出ないことも多いので、質問時間を 5 分にし、発表時間を 25 分に延ばした方が有効ではないか（現在は発表 20 分、質疑応答 10 分）、などが挙げられました。これらは今後の課題としたいと思います。

初日 28 日および 2 日目 29 日に行った研究論文発表では、2 会場に分かれ合計 25 本の研究論文と実践報告の発表がありました（音声をテーマにした 3 本のグループ発表を含む）。今年は応募数が発表枠数を大幅に上回り、約 4 割が不採用という狭き門となりましたが、その分レベルの高い発表が多かったように思われます。進行も発表者有志の指揮のおかげ

げで、すべてスムーズにはこべました。進行役を引き受けてくださった皆様に感謝いたします。

今大会では、基調講演者として地元ヨーク大学の太田徳夫先生を初めてお迎えしました。太田先生は、生きた日本語と一口に言ってもさまざまなものがあり、マンガやアニメ、若者の間で頻用されるくだけた話し方は、必ずしも生きた日本語として教え習得させるべきものではなく、最終的には学生が相手に失礼のない、好印象を与える日本語を習得することを教師は第一に考えるべきであると、さまざまな具体例を挙げながらお話してくださいました。

また、東京大学の上野善道先生が、過密スケジュールの中をお越しくださり、音声とアクセントについて講座を開いてくださり、音声の基礎講座では、難解になりがちな音声の話を非常にわかりやすくお話してくださいました。また、アクセント講座では、従来のように各語のアクセントをまるごと覚えても無駄が多だけで実際の発話では役に立たないので、語のアクセントに従って下げ、文の中で大事な意味のところで上げるよう指導するのが効果的であるという、コミュニケーションに主眼を置いた論を展開されました。これは大会後のアンケートでも「目から鱗が落ちる」思いがしたとの評を多くいただきました。

国際交流基金の派遣でアルバータ州教育省にこの6月着任された室屋春光先生は、生きた日本語の例として、アニメやマンガ、Jポップ、ゲーム、ケータイ、インターネットのブログなど、ポップカルチャーとITがそれぞれ具体的にどのように教室活動に利用可能であるかを探る講義をしてくださいました。また、国際交流基金日本語国際センターの有馬淳一先生も、インターネットやアニメ、TVコマーシャル、レアリアの使用、その他基金開発教

材のお話の他、来春発売予定の映像教材の紹介をしてくださり、生きた日本語教材を利用するにあたって、非常に貴重な情報をくださいました。

今年はいくつもの事情から、英語での研修は行えませんでした。ただ、これらの参加者は日本語で十分講義が理解できる方ばかりであったようですが、今後さらに幅広くノンネイティブの教師を巻き込んだ会作りをしていく必要があるかと思えます。

大会期間中、研究論文発表や基調講演、教師研修会が行われた最初の3日間はあいにくの雨模様でしたが、逆に1日中屋内にこもって勉強するには最適の天気だったような気がします。幸い4日目のムスコカ湖クルーズ日帰り旅行の日は、好天に恵まれ、昼食を含め3時間のクルーズも、リラックスした雰囲気の中、あっという間に終わってしまった感がありました。ムスコカはトロントから約2時間北に位置する避暑地で、日本人も多く訪れるところのようで、町のカフェなどでは店の人に片言の日本語で話しかけられたりする場面もありました。帰りにはクランベリー畑に立ち寄り、収穫法などについて学ぶと同時に、さまざまなクランベリー製品を購入する機会もありました。

今回、私自身、初めて大会実行委員長を務めさせていただき、いろいろといたらない点も多かったことと思えます。準備段階ではいろいろな心配、苦勞もありましたが、いざ始まってみると4日間の大会は駆け足で過ぎ、楽しい思い出となって残りました。副委員長として奔走していただいた杉本陽子氏、その他いろいろとご協力くださった理事の皆様、改めて感謝いたします。

新理事より

本年度年次大会において、理事会メンバーの半数以上が入れ替わりました。長年、会の運営にご尽力くださった6人の旧理事の方々の労をねぎらい、感謝の意を表したいと思います。

ここに新しく迎えた7人の新理事の方々に、紹介を兼ねて原稿を寄せていただきました。なお、挨拶や抱負などではなく、それぞれの方が体験したり、日頃思ったりしていることなどを中心に書いてくださるように、編集部よりお願い致しました。(編集部記)

小室リー郁子 (トロント大学)

快晴のトロント。外に出ると冷凍室に入ったかのように冷えた空気が体を包みます。カナダに住み始めてからは、「寒い」ではなく「冷たい」のほうがこの寒さの形容にはぴったりだと思ふようになりました。学生に「今日は本当にいい天気だねえ」と言う私に「はあ?!」と怪訝な顔。こんな寒い日はいくら快晴でも決して「いい」天気じゃないと言い張ります。同じ学生。「どうして『真ん中』って言うのに『真ん夏』って言わないわけ?」確かにどちらも「ま」のあとは/na/。一方は「真ん」になり他方は「真」だけ。いろいろ調べてみましたが、彼を納得させることができる答えは見つからず降参。ただ、調べている過程で、方言では「真中(まなか)」も存在すること(でも「真ん夏」はない)、今は誰もが疑わない「真っ赤」「真っ青」なども、かつては「まあか」「まあお」と言っていたことがわかりました。学生のおふとした疑問のおかげで気づかされることが多く、まだまだ「発展途上」の頼りない新理事ですが、どうかよろしくお願ひいたします。

下條光明 (ニューヨーク州立バッファロー大学)

初めてアメリカに来たのが18年前、今思えば当時インターネットやメールなしでどうやって生活していたんだろうと思ひますが、タイプライターや図書館のカード目録、カセットテープレコーダーがまだ

まだ主流の時代、といえ共感してくださる方も多いのではと思ひます。アメリカ生活3年目にバッファロー大学の日本語クラスにチューターとして足を踏み入れ、振り返ってみればそれ以来ずっとこの世界でお世話になっています。当初は英語教育の方が親しみがあり、日本語なんてどうやって教えるんだろうという大きな不安と、自分の母語を教えられるという喜びとの複雑な交錯が懐かしく思い出されます。奇しくもこのたび日本語教育振興会の理事というお役目をいただきましたので、ここで改めて初心に立ち返り(良くも悪くも)楽観的な性格をフル活用し、皆様から良い刺激をいただきながら頑張りたいと思ひますので、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

竹井明美 (ランガラ・カレッジ)

近年、心理学や脳神経生理学で話題になっているミラー・ニューロンについてScientific Americanの最新号で読んだ。この鏡の働きをもつニューロンは、相手の動きを見つめることによって、相手を感じ、行動する時に発生する脳の反応を、見つめる側の脳にも同様に起こさせるものだという。従って、共感や感情移入は論理的ではなく反射的なものらしい。このニューロンはヒトやサルでは検証されているが、その発達には生物種間の違いだけでなく、個人差もあるのだろう。ミラー・ニューロンを大きく育てて、常に論理、正論を優先させるのではなく、場

の空気を読んで臨機応変に対応したら、世の中のいさかさも少なくなりはしないだろうか。鏡ニューロンは、ヒトの脳内の言語に関連するブローカーエリアに位置し、言語習得にも大きく関与しているようだ。かつて、パブロフの犬に端を発した行動心理学がオーディオリンガル・メソッドをもたらしたように、鏡メカニズムの解明ももしかしたら「ミラー・コミュニケーション・メソッド」などという新しい教授法を生み出すかもしれない。

永瀬治郎（専修大学）

皆さん、はじめまして。

私は専修大学文学部の日本語・日本文学科で教鞭をとっています永瀬治郎と申します。

このたび、この学会の新米理事になりました。この学会には過去3度参加させていただきました。最初に参加したときから、会長をはじめ役員のみなさまがとても親切で、暖かい雰囲気の大いなる大会という印象を持ちました。また、夜の懇親会やツアーもとても楽しかったことを覚えています。

私の専門分野は社会言語学、特に若者言葉の研究を行ってきました。2回目、3回目に参加したときには発表もさせていただきました。新しい言葉が日本全国にどのように分布しているのか、集団の中でどのような伝播過程をとっているのかということ自分の研究テーマとしています。この学会では副会長の王先生が同じ専修大学にお勤めですので、王先生と一緒にこの学会のためにお役に立てることができるようがんばりたいと思っていますので、よろしくお願い申し上げます。

ライリー洋子（カルガリー大学）

私の研究室は楊先生（編集長）の向い側にある。それで大いに得をするのは、先生が電子製品の知識に強いことである。電子製品のおもちゃを買うのが、先生の趣味の一つである。そのみならず気に入ると私にも買うように勧める。私は勧められるとつい

その気になって買ってしまう。その一つがアイポッドである。掌の中に入るようなアイポッドを先生に勧められてからかなり久しくなる。楊先生の指導で、東西の古典から、日本のラジオから放送されるニュースの評論、映画評論に至るまで内容の幅はとてつもなく広い。それを聞く時間は毎日の犬の散歩の一時間と限られている。

以前この時間は短歌構想の時間であった。四季を通じて我が家の廻りにある自然楽しみ、短歌を創作し、八十八歳になられるモントリオール在住の先生に添削をしていただくのが、楽しみで、それゆえ犬の散歩も自然に楽しいものとなった。しかしアイポッドの楽しみを味わった現在、この貴重な一時間の内容が変わってしまった。朝起きて、日本のポッドキャストから昨日の内容をダウンロードし、犬を歩かせながら最新の日本の出来事に直接ふれる。流行語も含め最新のニュースなど、教師として今浦島にならないための予防策である。楊先生の向い側に研究室があるというメリットというかデメリットというか、とにもかくにも私一人の世界でも文明は常に変化するという一例である。

ラム（畔上）智子（レジャイナ大学）

サスカチュワン州、レジャイナに移り住んでからもう約18年が経つ。こんなに冬が厳しくて、人口の少ない所でも、僻地などと思ったことがないのが不思議がられている。東京の実家や友人たちにはさぞかし大変な生活をしているのだろうか、ある年には東京の某テレビ局から「海外で活躍している女性」—簡単に言えば「日本人なら誰も住まないような所で生き延びている女性」というようなニュアンスの取材を頼まれ「隣家までどのくらいですか？」などという質問を浴びて、「生活はごく普通ですよ。他の人取材してください。」と頼んだことがある。趣味はジョギングだというと「さすがカナダ人ですね、日本人でそんなに走っている人なんてめったに会いませんよ。」といわれ　ここでは普通なのになあ、と

思う。

この普通感が私はもう日本人ではなくなってしまったのかしら、と最近つくづく思う。

カナダの新移民として、長年が過ぎた今、生活は落ち着き、ごく普通の市民としての生活を送っているが、日本語教師としての仕事は、この平穏さとは対照的に何年同じことをしていても面白いこと、ためになることに頻繁に遭遇し未だに飽きていない。学生のダイナミックさ、エネルギー、日本に対する関心はいつも新鮮で本当にこの仕事をしていて良かったと思う。日本に関心があり、理解しようとする努力があってもカナダ人だからいまいちこの思想は腑に落ちないという考え。たとえば、「誰にお世話になりましたか？」と聞けば、「誰にも世話になってない」から答えられないとか、「今日は、誰に送って来てもらったの」という質問に別に自分では送って来てもらわなくてもよかったのだから、「ルームメイトに送って来てもらった」という必要はないと言う。また、日本人の学生にガム1枚しか上げ

なかったのに、彼女はガムを食べる前に「いただきます」と言って食べた。など、面白いコメントをよく聞き、こちらも「本当にそうだ、納得。」と思いながら笑いをこらえてしまうことがある。日本にいた頃は、こんな当たり前の日常表現を社会での決まり文句としてしか考えず、深く理解せず、「普通」の表現として受け入れていた。同じ環境の中に長くいると当たり前のこと、普通のことにも何も疑問を持たなくなってしまう。私は、日本とカナダの両国の文化、習慣を経験して、ものを客観的に見ることができるようになったと思う。カナダに来て、そして、日常、人を通じてまだまだ学ぶことはたくさんある。これからも、多くの人に出会って人間として成長していきたい。

新しい理事のチャウ レベッカさんの原稿は、事情で間に合いませんでした。

特別寄稿

日本語を教える仕事

太田 徳夫（ヨーク大学）

日本語を外国語として教えることが一生をかけてする仕事に価値するか否かは、日本語教師にとっては避けて通れない疑問であろう。自分の場合も、教師歴が十五年ぐらいになった時に、何か物足りなさを感じていたので、ちょうどインディアナ大学で夏季集中日本語講座の中級を担当するよう誘って下さった曾我松男先生にこの点について伺ったことがある。先生は、「そんなものでしょう」とおっしゃったが、私は心の中では、日本語教育はそれ以上のものであ

ると思いたい気持ちがあり、やはり何か釈然としないものが残った。実は以前から、「生きた外国語指導」は若い人の仕事で、四十歳になったらやめるべきではないかと考えており、そのころちょうど四十二・三歳であった。

学問的には、大学院で、第二言語習得の最新の理論を学び、特にコミュニカティブ・アプローチに関してはかなり自信があり、この夏季講座も、日本で仕入れてきた、当時としては最新のワープロを使っ

てコミュニケーション教材・指導法を、新しい試みとして積極的に導入した。学生は、アメリカ各地から来ていて、日本語を学ぼうという動機は高かったように思う。ところが、である。講習期間の二ヶ月間の半分以上が過ぎても、学生の力がつくどころか、クラスの雰囲気作りさえ満足に出来ていず、中間試験の成績も惨憺たる有様であった。D+を取った法律専攻の女子学生には、自分はこれまで常に平均点がA+で、こんなにひどい成績を取ったことはない、泣かれる始末。ある女子学生からは、何故文型練習をしてくれないのかと苦情を言われたこともある。そもそも、一年間の授業であれば、初めの二ヶ月ぐらいで、じっくりとこちらの意図と方針を分かち合えることが出来るのだが、夏季講習ではその余裕がないことに遅滞しながら気が付いた次第。自分としても、こんな大失敗の経験は一度もなかったのに、残りの一ヶ月間をどうするか深刻に悩んだ。今更文型練習に戻る気はさらさらなかったが、学生が使える例文を多くして、色々なコミュニケーション活動を工夫・導入し、学生には極力新しいアプローチについての理解と協力を得、納得してもらえるように努力した。人間関係の面でも、学生との信頼関係を築くよう、彼らと行動を共にし、こちらのことも分かち合ってもらおうと頑張った。その甲斐あってか、後期の半ばごろから、やっと学生が伸びてきて、最後は時間切れであったが、先生のやろうとしていることがやっと分かったと言ってくれる学生も出てきて、少し救われた気分であった。前述の法律専攻の女子学生も、期末でBを取り、よく頑張ったとほめると、自分にとって非常に謙虚になる経験だったと言ってくれたので、うれしかった。こちらにとっても準備段階での思慮不足・夏季講座に対する認識不足を謙虚に反省させられる良い経験であった。こういう失敗状況では、いい教師になろうなどという、いいカッコしいをする余裕など全くなく、短期間でどこまで失敗を回復し、状況を好転させるかに全力投球せざるを得なかった。

また、改めて、背景も受けてきた教育もかなり違う、初めて教える学生との間に二ヶ月間で信頼関係を確立し、彼らに効果的な日本語学習を指導するというのは、至難の業ではないかと痛感した。因みに、これ以後夏季講習は教えていない。この失敗がきっかけで、外国語教育にとって、教育的配慮がいかに大切か、特に、四年間の大学教育を通じて、学生の知的・精神的成長に外国語教育がどれほど役に立つか、また、語学教師の役割の大切さ、影響の深さ、広範さが身にしみて感じられるようになり、四十歳を過ぎて、出来ることはこれだという実感を強くしたものである。大学における外国語教育の教理—ディシプリンを異文化間コミュニケーションと考え、(1)日本語を素材として、学生に様々な異文化理解の状況で役立つ知識を学び、応用力をつけ、実地に体験してもらおうというのが骨子である。私は大分前から、専門の言語学的方法論を使い、文化研究の分野に深入りしているが、外国語習得にとってどんな文化知識と経験が必要かを自己の英語学習の経験から割り出し、自分なりの「日本文化」を日本語のカリキュラムを通じて紹介してきた。日本への交換学生制度に力を尽くしてきたのも、学生が日本に行って日本的な同一性—アイデンティティーを身につけてくることが、カナダの多文化主義を可能ならしめる、複数の同一性を獲得する大切な機会であると考えているからである。また、学習者に、自分にどの程度実力がついたかを実感させる機会として、日本語能力試験や日本語弁論大会を大切に考えてきたのもやはりそういう教育的配慮からである。

カナダにおいて継承言語としての日本語教育が非常に憂慮される状況にある中、高校・大学における日本語学習者の数は急増しているのが現状である。その理由はいくつか考えられるが、よく言われるアニメなどのポップカルチャーの影響以外に、「最後の侍」のような映画に代表される武士道などの日本の伝統文化に対する新たな興味、日本語の知識があると就職の際非常に有利であることがあげられる。

このような学習者の動機・目的に途惑っている日本語教師も多い。また、日本語がどんどん変化していると同時に文化も急激に変容している。日本人の若者の日本語が日本語学習者にとっていい手本・模範にならない状況が現出している。「若者文化」の影響も非常に強力である。こういう問題は日本語に限ったことではないし、昔にもあったが、インターネットに代表される国際化が急速に進む中、日本語教師としてどのように対応していくべきかを考えることが深刻に問われている。先ず、何のために日本語を教えているか。学習者が日本語に堪能になるよう手助けをするだけでなく、前述したように教育という観点から、国際化した世界の中で「外国語としての日本語教育」が外国語教育の一環として成長していくための根幹であろう。外国語習得・指導が、技術的な側面を持つだけではなく、全人格的な教育でもあるという認識の上に立って、これからどうしたらよいかを考えてみると、自ずと日本語教育の将来への展望が見えてくるはずである。日本語教育界の恩師、故小出詞子^{なみこ}先生が、1974年の日本語教育学会誌に「日本語教育の専門家」の要件として次のことをあげてられる。(2)

1. 日本語教育に対する職業的誇りと熱意
2. 明るい性格、忍耐力、きびしさ、国際性
3. 言語学の基礎的知識、第二外国語の能力、ことばの文化の知識、それ以外の補足的な知識

最後に、これに付け加えたいのは、今年のカナダ日本語教育振興会年次大会における基調講演でも述べたが、教育は学生の将来への夢を育てるものでなければならないということである。皆さんも、「夢のある日本語教育」の可能性を考えてみたらどうだろうか。外国語教育におけるテクノロジー利用などもそのような観点から見ると、学習者にも教師にも夢を与えてくれそうだとと言える。(3)

(注)

- (1) これは、昔(1976-79)若年の私を講師として招待して下さった当時モナシュ大学日本語学科長のネウストプニー先生の持論であった。
- (2) 小出詞子「日本語教育の専門家」日本語教育 25号、1974年12月、39-42頁。
- (3) 最後にこの拙稿を書くよう励まして下さった、カルガリー大学の楊曉捷先生にお礼を申し上げたい。

エドモントン・オイラーズ

室屋 春光

この十年ほどアメリカ、オーストラリア、カナダと英語圏での仕事が続いているので、普段の生活では日本語より英語に接することのほうがはるかに多い。英語的な発想にはかなり慣れてきているつもりなのだが、それでも日本語母語話者からみて日本語と英語との間での言葉の使い方や言葉に対する感覚の違いに驚かされるのがままある。

私が住んでいる町エドモントンは石油ブームに湧いていて、NHLのオイラーズの本拠地でもある。今

年6月、スタンレーカップ決勝でカロライナ・ハリケーンズに惜しくも敗れたのは記憶に新しい。で、この「オイラーズ」、はじめてこのチーム名を耳にした時は「石油採掘の連中とかいうような意味であろう。それならそれなりに感じが出ているかな」と勝手に推測したのだが、この言葉にはどうもそのような意味はないようで、愛用のオンライン辞書「英辞郎」(<http://www.alc.co.jp/>)で確認すると「タンカー、給油係、油差し、油井」などとあって、はなはだ勇

ましくない。いずれにしても、日本でプロのスポーツチームに日本語を使ってこのたぐいの命名をするなど想像することもできない。

田中という名前を聞くたびに田んぼの真ん中をイメージする人はいないことからわかるように、固有名詞というものは日常化してしまうとその言葉そのものが本来もつ意味を考慮することはない。オイラーズという名称についてもその言葉の意味やイメージを穿鑿することにあまり意味はないのだが、愚問と知りつつ職場の同僚の何人かにオイラーズという言葉の言ったり聞いたりするときには何か感じることはあるかと聞いてみた。案の定、返ってきた答えは「チームの名前だから、その言葉そのものに対して特に何か感じることはない」というものだった。

だがそれでも、スポーツチームにオイラーズと命名する英語話者の感覚は、日本語話者の私にとっては理解しにくいものがある。フットボールのグリーンベイ・パッカーズなども同様だ。この場合は強いて日本語に訳すと精肉包装業者とでもするしかないだろう (One whose occupation is the processing and packing of wholesale goods, usually meat products - American Heritage Dictionary)。地域の主要産業をチームの愛称にすることでより多くの地元ファンの支援を受けるとするのがこの命名の趣旨なのだろうが、日本の球場で神戸牛包装業者というプロ野球チームが活躍している姿を思い浮かべるのは容易ではない。ノンプロの場合は会社名がそのままチーム名になるので似たようなものではないかとお考えになる向きもあるかもしれないが、それはオイラーズやパッカ

ーズのようなチームの名称／愛称とはちょっと事情が異なる。

ボストン・レッドソックス、シカゴ・ホワイトソックスも意味を考えると妙である。ユニフォームのソックスの色がそのままチームの名称になったものかと思うが、その伝で仙台白靴下、熊本赤靴下などという、浅草あたりのしけた芝居小屋で細々とギャグを飛ばしている地方出身のコメディアンのようなではないか。といっても、歴史的にこういう命名法が日本にまったくなかったわけではない。井伊の赤備えなどはいい例だろう。

英語のスポーツチームの命名法としては、パイレーツ、ブルージェイズ、シャークスなどいかにもそれらしいと思わせるもののほうがはるかに多く、オイラーズやパッカーズ、ホワイトソックスのような例は少数派である。しかし、これらの例が日本語話者にとって違和感を感じさせるものであるという事実はきわめて示唆的で、現代日本語にカタカナ言葉が氾濫しているという現象にも多分に関係しているにちがいない。

室屋春光氏は、これまでに中国、日本、インドネシア、オーストラリア、ハンガリー、米国などで日本語を教え、今年の6月に国際交流基金の派遣でアルバータ州教育省の日本語アドバイザーとしてカナダに着任した。最新の日本語教育情報の提供、教材の開発、研修会の実施、学校訪問、教師ネットワーク構築などの多岐にわたる方法で日本語の先生を支援する業務をこなす一方、「日本語メモ Nihongo Memo」(www.nihongomemo.com)を運営している。

「日本語-カナダ」電子メールグループ

「日本語-カナダ (Nihongo-Canada)」電子メールグループは、カナダで日本語を教えている先生方のためのメーリングリストで、日本語教育に関して意見・情報を交換したり、教室で使えるアイデアを共有したり、質問をしたりする場を提供します。グループに登録すると、グループに投稿されたすべてのメッセージがお手元に配信されるとともに、メッセージを投稿するとグループのメンバー全員に配信されます。

このグループは今年8月に始まり、11月末現在の会員数は70名、今後も会員数はどんどん増えていくことと思います。登録をご希望の方は、グループ管理人のマクリン由美子宛に入会希望の旨を書いた電子メールをお送りください (<Yumiko.McLean@gov.ab.ca>。日本語アドバイザー (国際交流基金派遣) アルバータ教育省 室屋春光

リレー随筆

今号から「リレー随筆」という新しい企画を立てました。随筆第一号には、元会長の西島さんと、今年から理事会、とりわけニュースレター編集チームに加ってくれたライリーさんに依頼しました。なお、次のリレー執筆者を指名することも無理に頼んでおいたので、指名を受けた方はぜひとも快く引き受けてくださることをお願いします。（編集部記）

名前の呼び方 —— 発音は日本語？それとも原語？

西島 美智子（ニューブランズウィック大学）

楊編集長から、「リレー随筆」の原稿依頼をいただいた。トップバッターとしては少々緊張するが、普段感じていることを、おしゃべり感覚で書くことにした。これから続けて書いてくださる方々にも重荷にならないことを祈りつつ。

カナダに住むようになって12年になる。ニューブランズウィック州という、カナダの東海岸にあって日本からも遠いところだ。バンクーバーやトロントのような「大都市」もなく、当然ながら、日本人居住者も少ない。

こんな小さな地方の良いところは、住んでいる人がとても親しみやすいことだ。そして会話が始めると、まずは名前の紹介となる。たいていの人は、もう一度私の名前を聞いて、2、3回、呼び方を確認する。おもしろいな、と思うのは、一生懸命、正しい発音で名前を呼ぼうとする姿勢だ。私の名前の場合、特に、苗字の方が4音節とむずかしい。それでも、きちんとその発音で呼ぼうとする努力、それに正しく言えた時の誇らしげな表情が、とても印象的なのだ。そして、この姿勢は、とても礼儀正しいものに受け取れる。

これが、ローマ字書きされた名前だとどうだろうか。Michiko は、馴染みのある地名、Michigan から、ミシコと発音されることが多い。それでも、その発音でいいのか聞いてくれるし、正しく発音したもの

を伝えれば、言い直してくれる。自分の名前というのは、やはり、正しく発音されて初めて自分の名前になる気がする。音は同じでも、漢字が違えば自分の名前ではないのと同じではないかと思うのだ。おしゃべりな響きの呼び方で呼ばれると、別人になったような気分になるのはいいが、やはりしっくりこ

ない。私の場合、ミシーコと柔らかく囁かれるより

は、ミッチコと力強く言ってもらった方が、はるかにピンとくるのである。

よく思うのは、ヘボン式表記によるラ行音の「r」だ。この音が入っている日本人の名前は、まず間違いなく、英語の「r」音で発音されていることだろう。こういう名の方々、名前の呼ばれ方をどのように感じられているのだろうか。是非、伺ってみたいと思う。

さて、そこで考えさせられるのが、日本語クラスでの学生の名前の呼び方である。私が教えるクラスには、英語系及びフランス語系のカナダ人、中国人をはじめとするアジア人、さらに、ヨーロッパや南米からの留学生もいる。したがって、本来の名前の言い方も、英語の発音だけでは括れない。私は、最初の授業の時、クラスで使う自分の名前を学生自身に決めてもらうことにしている。フルネーム、ファ

ーストネーム、それを短くした呼び名、全く別のニックネームと、何でもいい。そして、その名前を正しい発音で呼ぶように心掛ける。自分自身の経験から、名前を呼ぶ時の発音にはこだわりがあるからだ。

しかし、だんだん問題が出てくる。たとえば、日本語で質問をする時、名前を原語通りの発音で呼んで、その後に「さん」をつけるというのは、言いにくい上に響きもよくない。一方、学生の方は、カタカナの導入とともに、多くの英語の言葉が日本語の中に入り、日本語の音声体系にあわせた発音で使われていることを学ぶ。教科書の中に出てくる人物も、Mary がメアリー、Robert がロバートと表記され、そのように発音される。日本語教師としては、学生に日本語の音声に慣れてほしいと願うし、彼らの名前が「日本語」ではどのように表記され、発音されるのか、知ってほしいとも思う。学生が日本語で作文を書くようになった時、自分の名前はカタカナ名を使い、それを読み上げる時には、やはり、表記の通りに発音できることを目標としなければなるまい。いつも陥るジレンマが、ここにある。

では、当の学生はどのように感じているのだろうか。私の場合、日本語を教える対象が大学生という若い世代であるせいか、結構、さっぱりしている。彼らは、日本語になった自分の名前をおもしろそうに見て、早速、書き方の練習をしたり、お互いの名前を呼びあったりする。日本語のクラスの中だけで

使われるニックネームのように感じているのかもしれない。つまり、「日本語の呼び名」ができたことによって、日本語を勉強しているのだという実感を持つシミュレーション効果なのかもしれない。それなら、教師もあまりこだわらずに、初めから日本語になった名前の呼び方を使っていいのかもしれない。"Never mind" "Take it easy"とすることなのだろうか。日本に長年暮らしている方々には是非伺ってみたいことのひとつである。

では、この辺で私のおしゃべりを終わらせ、次の方へバトンタッチをしようと思います。アトランティックカナダのハリファックスで日本語を教えていらっしゃる時にお会いした、青木恵子さんを指名させていただきます。現在は、オンタリオ州キングストンで日本語教育に、そして育児にとご活躍中です。宜しく願いいたします！

執筆者のプロフィール

1994年に横浜からニューブランズウィック州のフレデリクトンに渡る。以後、ニューブランズウィック大学、さらに2001年から、隣接するセントトーマス大学で日本語を教える。専門は、第二言語教育。2001年から2004年の3年間、CAJLE会長を務める。また、カナダに移ってから、自然の美しさをテーマにした写真を数多く撮り、写真家としても活躍する。来年は、南アフリカでのワークショップのアシスタント、ニューヨークでの写真デビューと忙しい。

日本文明を形作る神道

ライリー 洋子（カルガリー大学）

日本とは非常にユニークな国である。明治神宮の深々たる森を果てしなく歩き、神社の前で参拝し、「伝統」という二字を噛み締めながら神宮の森を出てくると原宿の大通りにでる。そこで目にするのはコギヤル、ロリータと呼ばれる目を見張るような得

体の知れない様子をした若い女の子たちだ。一首歌が浮かんだ。

- ・ 神宮と背中合わせに原宿のコギヤル、ロリータ、「これが日本だ」

日本がユニークな国であるという意識はあるにし

でも、日本の特異なる原因を「此れ故に」と意識している人は少ないと思う。もちろん日本のユニークさの原因は数限りなくあり、「此れ故に」という原因をひとつ選ぶことは不可能であるが、ユニークな理由の一つとして神道を挙げる事ができる。

1992年にサミュエル・ハンティングトンが The Clash of Civilizations という本を書いた。その本の中で、彼は世界を八つの文明に分けている。孔子及び仏教に基づく文明、ヒンドゥー教国、イスラム教国、正教徒派、西洋（キリスト教）、ラテンアメリカ（カトリック教）アフリカ、そして日本（神道）。日本以外の文明国は宗教なり、思想なりを幾つかの国で分け合っている。彼の目から見ると、この大きな世界の中で日本文明のみが孤立しているのである。

そう云われて見ると、日本は孔子や仏教の影響下にあったものの、こういった教えや宗教は日本の政治や伝統を根こそぎ覆しはしなかった。神道という日本古代の宗教は教義こそないが、日本人の心の一部に根強くしがみついていた。祖父の時代からカトリック教徒である私ですら、神社などを参拝するときには、違和感なく手を合わせて祈れる。これは私が日本人であるからに他ならない。聖徳太子が言っているように、神道はお皿のようなもので、その上に他国の宗教を乗せて、それを自由に信じることができ、それを当然だと思っている。他の多くの宗教はそうはいかない。一神教を信じる国の人々は日本人を不可解な人種と感ずるかもしれない。それにしても、神道は日本人の生活の一部であり、伝統であり、精神であり、自然との融和、純粋さ、簡素さなどを無意識のうちに教えてくれた宗教である。

ダニエル・ブースティンは The Creators という本の中で、西洋の文明は「生存の文明」であり、日本は「更新の文明」であると分析している。すなわち、西洋の古代の建物の発想からみても、それは全て石の建物から始まり、レンガなど自然に破壊されにくい素材を土台として出来ている。それは西洋人が常に過酷な自然と闘いながら何世紀も生き延びて来た

その人間の力の象徴だという。その半面日本の建造物は古代から自然や時の崩壊にもろい木で造られている。それは神道に基づいて自然を受け入れ、死を受け入れる姿であり、二十年毎に立て直す伊勢神宮などはまさに神道が代表する更新の良い例だというのである。

すなわち外国人が見る日本はやはり神道を基盤におき、過酷な自然をも成り行きとして受け止め、自然と共存し、自然から与えられる困難を逆手にとって力強く生き、逃れられぬ死を恐れず、新しき生命の誕生を受け入れる準備ができていると解釈しているのである。

外国人が日本をどう解釈しようと現代の日本に於いて神道は日本のユニークさを際立たせると同時により日本的なところを強調しているものと思われるのである。それが文明国家として日本が孤立している理由の一つと言えるのであろう。

責任を果たし、さて、バトンタッチはと左右見回してみるとやはり経験の浅い私は知っている方が限られていることに気づきました。そこでイースタン・ミシガン大学の桶谷さんに白羽の矢をたてました。高校時代入学試験のために地理を専攻しておりまして、「五大湖を分けているのはミシガン州」などと暗記したのを覚えております。カナダと異なった文化のようなことを伺えたらと思っております。よろしく願いいたします。

執筆者のプロフィール

成城大学大学院でシェークスピアを専門に研究し、オタワ大学で勉強した後、ご主人の仕事の転勤でモントリオール、トロントを経て石油のメッカ、カルガリーに移る。ロッキーの麓のカルガリー大学で、日本文明、映画からみる日本文化、日本語など様々な科目を15年間教え、今日に至る。2005年に井上靖の『風林火山』の英訳を上梓した。読書や短歌をたしなみ、社交ダンスやヨガを楽しみ、カルガリーフレームズの大ファンで、「幸」という名の愛らしい柴犬を可愛がっている。

連載

日本語の本を楽しみながら（最終回）

王 伸子（専修大学）

以前も書きましたが、今年も年度の後半の「一般日本事情」では、読んだ本について、内容を口頭発表により紹介するという授業を行なっています。原則として、小説等文学作品を選ぶことと指示していますが、場合によっては、エッセイ、評論等でも可としています。日本の大学で学んでいるので、日本語で読む本は、ほとんどが学生自身の専門科目に関するものに限られてくるので、普段、読むことが少ないものを読んでみる、というのがその狙いです。発表を聞いた後、フロアから質問、意見を聞き、発表者がそれについて答えるという形式で行なっています。

学生の持ってくる作品はさまざま、川端康成の『雪国』や三島由紀夫の『金閣寺』に挑戦する学生もいます。一方、宇宙戦争といった新しいものや、いわゆる「携帯小説」と言われる、携帯電話に配信された人気現代小説を出版したものを持ってくる者もいます。そういったものは教師にとっても新しい情報であり、学生がどこから情報を持ってくるのか感心しきりです。図書館や書店で探すだけでなく、インターネット上での情報も駆使して作品を選んでくるので、私が予想している範囲をこえたものも出てきます。また、現代的なものが出てくるので、それにとまってカタカナ語や、新しいカテゴリーの情報なども飛び出すので毎週の発表が楽しみです。まず、そのいくつかを紹介して、話を始めましょう。

先日、東野圭吾著『変身』という本が、中国人の男子学生、李飛龍君によって紹介されました。カフカの『変身』ではなく、日本人の著作です。あらず

じについては、不慮の事故によって世界初の脳移植手術をした一人の青年が主人公という設定ですが、心と頭が、つまり本来の自分の意識である「心」と、移植した脳である「頭」が別々の意識を持ち、闘うのだと発表者は説明しました。

しかし、それに対して心理学科の学生が、心というのは、医学的には脳のことなのだから、心と頭が闘うというのはおかしい、むしろ、本来の脳と移植した別の脳の思考が闘っているのだなどと、反論します。そのことから、心とは何か、理性とは心ではないのかという議論に発展しました。食べれば太ってしまう、というのはわかっているけれども、つつい食べてしまうというのも心と頭の戦いか、などという身近な例も出ましたが、それは単に意志が弱いということで、そんな単純なことが心の闘いなら、毎日疲れて生きていけない、という意見も。

また、人間の死亡宣告は心臓の停止によって行なわれるが、脳はしばらく活動を続けるので聴覚は生きているという話や、そもそもこのストーリーの中で、脳が損傷してしまった本人が、本人自身の意思で脳の移植を承諾することができたのかなどという意見も出され、活発な討論が展開されました。この著作はしばらく前に映画化されているので、ウェブ上でもいろいろと検索可能です。

それに続き、『明治不可思議堂』という面白い本も紹介されました。呉邱静さんという中国人の女子学生が持ってきたものです。これは、横田順弥というSF作家による著作ですが、明治時代の不思議な話を紹介した短編を集めたものです。例えば、明治時代に記録の残る、人の気配のない部屋でお皿や灰

皿が中に浮かび上がり飛んでくるといった、いわゆるポルターガイスト現象の記録などが紹介されています。

これについては、「そんな不思議なことは信じられない」「写真はあるのか」、はたまた「アメリカ映画にはよくポルターガイストが題材となっているけど、欧米特有の現象では？中国には絶対ない現象」などという意見も出されました。ポルターガイストという語から、日本語や中国語ではなんと言おうのかという疑問が出されましたが、辞書を引いてみると、「ポルターガイスト」という語はドイツ語で、日本語では心霊現象、搔霊現象というようです。この授業では、必ず辞書を持参し、分からない語はどんどん引きながら理解することとしています。今は、どの学生もすべて電子辞書を使用しているので、辞書を持参することという条件を出しやすくなっています。ただ、そうした電子辞書にはカタカナ語辞典や外来語辞典もついていないと、留学生の場合、調べる幅がぐっと狭くなってしまいます。

学生が本を選択する場面から、この発表の準備が始まるのですが、経済学や社会学などといった専門科目と関係のない日本語の作品を自分で選んで読んでみるということを経験し、新しい日本での楽しみに気がついてくれば、と期待しています。

さて、ポルターガイストなどのカタカナ語といえ、最近では留学生でもテレビ番組その他から、普

段の生活や教科書には出てこない、メタボリックシンドローム、セルライト、カテキンといった健康方面の外来語を耳から覚えてきたりします。もちろん、授業ですべてをカバーすることは難しいのですが、こうした語は、マーケティング学科などでは商品学などで関わることもあるので、そうした内容を専攻している学生を扱う場合には、教師もビジネストレンドを扱っている雑誌等でチェックし、必要に応じて教材化できるようにしておくと思えます。まさに、時々刻々と移り変わっていく日本事情に即したものになると言えるのではないのでしょうか。

この「一般日本事情」に関する話題も、今回は再び「日本語の本を読む」ということを取り上げ、ちょうど一回りしてきたようです。授業などの工夫や報告も含めて皆さんに長い間読んでいただきましたが、この辺でひとまず終了したいと思います。

言語を教えるということは、文化や事情も取り上げるということになりますので、どの国で教えていても、それなりに有効な題材として取り上げれば学生の興味を喚起し、それによって教師も新しいエネルギーを得ることができます。また、新しい話題と内容を蓄積し、みなさんと情報交換などできますようにお願いながら、この連載を閉じたいと思います。どうもありがとうございました。

活動報告

活動報告とこれからの活動案内

2006年度年次大会活動報告

2006年度年次大会は、国際交流基金及び、同基金トロント日本文化センターの多大な援助協力をいただき、国際交流基金トロント日本文化センターを再び会場に、8月25日（金）から27日（日）まで、3日間にわたり開催された。なお、4日目、28日（月）は、自由参加によるムスコカ湖日帰りツアーが実施された。開会式には、在トロント日本国総領事館川上公一総領事、及び、国際交流基金トロント日本文化センター齋木宣隆所長より祝辞をいただいた。

今年度の基調講演は、ヨーク大学より太田徳夫先生をお招きして「岐路に立つ日本語教育」のテーマで行われた。豊富な経験を踏まえた興味深いトピックで、言語面での変化、怪しい日本語の具体例を多く取り上げて助言され、貴重な講演だった。教師研修会4セッションは、カナダ、日本からの講師により、多岐にわたる指導法、実践法が展開された。研修会1は、国交流基金派遣、室屋春光講師（カナダアルバータ州教育省）により「日本のポップカルチャー— IT を利用した教室活動」のテーマで行われた。ポップカルチャーを日本の流行文化としてとらえ、IT などを利用して日本語学習を進める指導法の実例と、情報・材料の入手方法、検索エンジン及びサイトの紹介など数多く紹介され又、ブログ、ミクシィの利用についての説明など大変に興味深く参考になった。研修会2、3は、「日本語音声の基礎」及び「日本語アクセントの基礎」のテーマで、東京大学大学院 上野善道教授による講義が行われた。人間は世界中の言語のどんな音声でも習得が出来るが、それには、発音面での筋肉トレーニングと聞き取り面での頭の柔軟性が必要となる。音声の出し方の実例とそ

れを視聴するための捉え方を、器官の説明と実習で重点的に指導された。また、日本語アクセントの指導では、単語のアクセントに従って下げ、文の中で大事な意味のところで上げる。それには、アクセント感覚を身につけ、ピッチの動き、上がりと下がりによる動的変動パターンを捉えることが把握の上で肝要など、多くの実例を挙げて示された。研究発表4は、国際交流基金日本語国際センター 有馬純一講師により「国際交流基金開発教材の紹介—使い方・指導の実際を中心に」のテーマで最近開発された教材の紹介—授業の進め方、教室活動、及び、現在制作中の教材の概要が数多く紹介された。

研究論文発表は8月25日、26日、午前2日間にわたり2会場同時進行にて、アメリカ、カナダ、日本から合計30名の参加者、グループを含む発表があった。今回は、「日本語教育と生きた日本語」のテーマを反映して、教育現場からの実践報告が多く、発話の学習と教え方の向上、発音学習法、コミュニケーション活動での文法指導など、大会テーマに沿った発表が行われた。

なお、大会2日目の夜、トロント市内の中華レストランにて懇親会が行われた。テーブルを囲んで、和やかな会食をしながら余興が催され、替え歌、合唱など賑やかな親睦会となった。昼休み中の教師間の情報交換や、恒例のCAJLE出版物、にほんごサークル、及びJP Tradingの教材展示即売が行われた。

年次大会プログラム及び、定例総会の詳細は次の通りである。

研究論文発表（プログラム順）

8月25日（金）

研究論文発表1（会場1）進行：王伸子（専修大学）
畑佐一味・福田真樹子（パデュー大学）：全寮制の夏

期集中講座における日本語初級話者の会話の流暢さの発達／池田佳子（トロント大学・ハワイ大学マノア校）：第二言語対話能力の向上：会話上で「質問をする」という行為／赤井佐和子（ヒューロン大学）：スピーチアクト(発話行為)の学習、教え方の向上：日本語教育におけるアクションリサーチの実践報告

研究論文発表 1 (会場 2) 進行：戸田貴子（早稲田大学）佐藤慎司（コロンビア大学）：新しい文化概念の捉え方とその実践：ポッドキャストプロジェクト／大谷麻美（奈良大学）：英語を母語とする日本語学習者の話題提供と話題転換一待遇性からのケース・スタディー

研究論文発表 2 (会場 1) 進行 三浦秀松（徳島文理大学・ニューヨーク州立バッファロー大学） ショー出口香（パデュー大学）：大学生の日本語学習動機に関するインタビュー調査：なぜ、日本語学習を続けるのか／左治木敦子（インディアナ大学）：異文化学習の手段としての知的共感／野呂博子（ビクトリア大学）：日本語教育における演劇的アプローチ：話し言葉としての日本語の分析と習得

研究論文発表 2 (会場 2) 進行：桶谷仁美（イースタン・ミシガン大学）鈴木崇夫（名古屋外国語大学）：学習言語を育てる継承語教育ーアルバータ州“International Bilingual Programs”／米本和弘（マギル大学）：再話と絵の分析を取り入れた日本語指導ーセミリングル状態にある生徒の事例研究ー／平川眞規子（東京国際大学）：英語母語児による日本語の動詞の習得過程について

8月26日（土）

研究論文発表 3(会場 1) 進行：原田哲男（早稲田大学） グループ発表「日本語教育と音声の関わりー言語習得・発音・聴解の支店からー」 原田哲夫（早稲田大学）：日本語イマージョン教育に於ける音声習得とその維持／戸田貴子（早稲田大学）：日本語発音練習のためのシャドーイング教材の開発／王伸子（専修大学）：上級学習者の聴解における音声言語の重要性

研究論文発表 3 (会場 2) 進行：野呂博子（ビクトリア大学） 下條光明（ニューヨーク州立バッファロー大学）：主題の「は」と対照の「は」の再考察／石山治（ニューヨーク州立バッファロー大学）：文法化・意味変化の観点から見た日本語の人称代名詞／高宮優美（パデュー大学）：自己弁護の「ものだから」ー説得の「のだから」、理由の「から」と比較してー

研究論文発表 4 (会場 1) 進行：赤井佐和子（ヒューロン大学） 桑原陽子（福井大学）：非漢字圏日本語学

習者の漢字の再認に及ぼすイメージ形成の効果／柴崎秀子（長岡技術科学大学）、玉岡賀津雄（広島大学）、高取由紀（ジョージア州立大学）：英語母語話者の和製英語の知識と意味推測に及ぼす日本語学習経験の影響／レイノルズ・ブレット（ハンバー・カレッジ）、原田照子（桜美林大学）、山形美保子（朝日カルチャーセンター）：日本語版グレイディッド・リーダー開発への取り組み／小野博（メディア教育開発センター）：日本人大学生を対象とした日本語学習とその成果

研究論文発表 4 (会場 2) 進行：下條光明（ニューヨーク州立バッファロー大学） 王崇梁（国際交流基金日本語国際センター）：日本語の「動詞＋（よ）うとしたが」と中国語の「想、正要」の対照研究／矢吹ソウ典子（ヨーク大学）：初級レベルの大学生を対象とした日本語関係節の効果的教授法／三浦秀松（徳島文理大学・ニューヨーク州立バッファロー大学）：有声促音の音声特徴に関する一考察／浅野真紀子（サンフランシスコ州立大学）：促音を含む単語習得の問題点

基調講演及び教師研修会（プログラム順）

8月25日（金）午後

教師研修会(1) 講師 室屋春光（カナダ アルバータ州教育省 日本語アドバイザー、国際交流基金派遣講師）：「日本のポップカルチャーーIT を利用した教室活動」

8月26日（土）午後

教師研修会(2) 講師 上野善道（東京大学大学院教授、日本語言語学会会長）：「日本語音声の基礎」

8月26日（土）午後

基調講演 講演者 太田徳夫（ヨーク大学 言語・文学・言語学学科日本語科・韓国語科 主任）：「岐路に立つ日本語教育」

8月27日（日）午前

教師研修会(3) 講師 上野善道（東京大学大学院教授、日本語言語学会会長）：「日本語アクセントの基礎」

8月27日（日）午後

教師研修会(4) 講師 有馬純一（国際交流基金日本語国際センター専任講師）：「国際交流基金開発教材の紹介ー使い方・指導の実際を中心に」

ムスコカ湖日帰り旅行：企画・リーダー 杉本陽子
8月28日（月）、トロントより 300 km 北西にある湖

にガイド付きで、ほぼ満席のミニバスに乗って朝 8 時過ぎに出発した。紅葉には少し早い秋景色を窓越しにガイドの説明を聞いたり、クイズなどしてバス旅行を楽しんだ。ムスコカ湖では遊覧船に乗って対岸の景色を眺めながら昼食を楽しみ、夜 8 時頃無事に帰着した。

2006 年度定例総会

王伸子会長挨拶：今年は、念願のヨーク大学の太田先生を基調講演の講師としてお招きすることもできましたし、日本からは東京大学の上野先生にもお越しいただき、大変充実した大会になったとうれしく思っています。カナダの各地から、そしてアメリカ、日本から多くの会員が集い、再びトロントで旧交を温めることもできました。2 年後に、CAJLE は設立 20 周年を迎えますが、今年は理事改選もあり、重要な年でもあります。しかし、現在、さまざまな意味で CAJLE は曲がり角に来ており、研究面、財政面等、課題が山積みしているという状態です。今後とも、CAJLE のために、会員各自のご理解と協力が必要となります。どうぞ引き続き、ご支援、ご協力をお願い致します。カナダの日本語教育のために貢献できるよう、理事も一致団結してがんばって行きたいと思っております。

1. 2005 年度活動報告及び2006 年度活動予定

(1) 2005 年度年次大会及び定例総会 (清水)

2005 年度年次大会は、国際交流基金、国立国語研究所、ビクトリア大学人文学部他様々な機関から多大な援助をいただき、且つ BC 州日本語教育振興会の協賛を得て、8 月 19 日 (金) より 8 月 21 日 (日) までの 8 日間にわたり、ビクトリア大学を会場に開催された。なお、8 日目の 22 日 (月) には、自由参加による日帰りバスツアーも実施された。開会式には、在バンクーバー日本国総領事館から多賀敏行総領事、八木俊樹領事のご出席を仰ぎ、祝辞をいただいた。今年度は「岐路に立つ日本語教育」のテーマを中心に、同時進行による日本語、英語の研究論文発表 28 点、日本語教師研修会及びワークショップ、親睦交流会が

行われた。参加者総数 94 名、カナダ、日本、アメリカ、韓国、香港からの発表者、参加者、延べ総数 235 名を迎えて盛会且つ成功をおさめた。(詳細はニュースレター 31 号参照)

2005 年度定例総会は、8 月 20 日 (土) ビクトリア大学、Clearihue ビルにて開催。王伸子会長の挨拶。今年は理事選出がないので、西島美智子議長から 2004～2005 年度現理事・役員の紹介が行なわれた。

会長及びジャーナル 王伸子、副会長及びジャーナル 桶谷仁美、書記及びオンタリオ部会 清水道子・鈴木美知子、会計及びオンタリオ部会 中尾良子・渡並美和、ジャーナル及び発表企画 谷原公男、ニュースレター及びホームページ 楊曉捷、ニュースレター、ホームページ及びアトランティック部会 西島美智子、ニュースレター及びオンタリオ部会 杉本陽子、ニュースレター サマレル清水史子、発表企画 金谷武洋、2005 年度大会企画 野呂博子、アトランティック部会 大江都。(詳細はニュースレター 31 号参照)

(2) 2005 年度部会活動及び 2006 年度活動予定

1. 2005 年度 3 部会合同活動報告及び 2006 年度活動予定 (鈴木)

<オンタリオ部会活動報告>

昨年度に引き続き新移住者協会日本語プロジェクトと提携協力し合って以下 3 項目の活動を実施した:

- (A) 継承日本語教育の啓蒙、
- (B) 日本語教師研修、
- (C) 調査プロジェクト。

- (A) 継承日本語教育の啓蒙

継承日本語教育勉強会

NJCA 日本語プロジェクトと共催、「家庭における子どもの読み書き能力育てー日本語学校の学習を効果的にサポートする方法をさぐるー」をテーマに、講師鈴木美知子氏によるワークショップを中心にした勉強会を実施した。この他、学校説明会及び新移住者協会主催にて「継承日本語教育の来た道行く道」をテーマに新移住者協会創立 30 周年記念座談会が開催された。

(B) 日本語教師研修

CAJLE 主催により「初級から中級へ伸びる文法とその教え方」と題し、講師谷原公男氏による教室で直ぐに役立つ文法講座を開催し、新移住者協会日本語プロジェクト主催にて「包んで癒す言葉・切って裁く言葉」と題し、講師金谷武洋氏により日本語教師として心得ておきたい日本人の精神構造や日本文化との関わりの中で形成された日本語についての日本語文法講座と、実践・教養両面からの文法講座が開催された。

(C) 調査プロジェクト

CAJLE 主催により、オンタリオ州立高校 School Guidance Counsellor であり、プラーチャレンジ日本語審査担当者高田達氏を招き「プラーチャレンジ説明会」を開催した。なお、3月に実施された日本語文法講座の場を借り清水道子部会担当者により「プラーチャレンジ説明会その後の経過報告」がなされた。

*詳細はニュースレター32号参照

<今後の活動予定>

2006年-2007年も新移住者協会日本語プロジェクトと共催で3回に絞った活動を企画している。

1) 講演会 年1回の企画とする。

開催形式：CAJLE/NJCA 共催

講演者：小室リー郁子氏

開催期日：2007年2月4日(日)

講演内容：検討中

2) 継承日本語教育講演会

開催形式：CAJLE/NJCA 共催

講演者：鈴木美知子氏

開催期日：2006年10月1日(日)

公演内容：幼小児期における第一言語を十分に育てることの大切さについて

*講演に先駆け、NJCA 日本語プロジェクトの本邦研修参加中学生3名による報告会が実施される。

3) プラーチャレンジ報告・説明会

NJCA 日本語プロジェクト主催、教師によるワークショップ・日本語学校教師汎米研修会報告と併せ

実施される。*06年度 プラーチャレンジ経過報告、日修学院本部先生。* プラーチャレンジの内容概略説明バーバー洋子トロントクレジットコース教師。
開催期日：2006年10月22日(日)

2. アトランティック部会報告(大江) 2006年8月 CAJLE大会

昨年三月に アトランティック地区の日本語弁論大会が、フレデリクトンの UNB で開催され、その審査員長として、当時、アルバータ州の教育省に勤務されていた宇田川洋子先生に来ていただいた。その折、宇田川先生にご協力いただき、弁論大会の前後に、二種類の会合を開いた。

一つは、宇田川先生を講師とした「勉強会」で、対象は UNB および、セント・トーマス大学に留学する、日本語教育に関心のある、日本人学生。ワークショップ形式の講義に加え、言語教育、日本語論、文化論などなどに関し、活発な質疑、討論が行われ、意義ある「勉強会」となった。

二つ目は、弁論大会後の夕飯をかねての会合で、参加者は、宇田川先生、UNB の西島、マウント・アリソンの大江、および、モントリオールの日本総領事館の文化担当スタッフ、リン・ペルリン氏の四名。

「日本語教育の現状と将来」といったような話題で、情報、意見交換を行った。和やかで、かつ有意義な話し合いの場となった。残念ながら、遠方から弁論大会に参加した、セント・メアリーズ大学の先生方は、帰路を急ぐ事情から、参加はできなかった。

アトランティック地域には、日本語講座を持つ大学が、合計で七大学ある。しかし、それらは広大な四州に散在し、簡単に集まれる状況にはない。したがって、今後も、無理のないよう、可能な機会を利用して、活動を進めていきたいと考える。2007年3月には、日本語弁論大会が、マウント・アリソン大学で開かれる。2006年と同様、アルバータ州から、今夏就任された室屋春光先生をお招きし、弁論大会の前後に何らかの会を設定したいと話している。

3. 企画研究部(谷原)

2005年度年次大会における研究論文発表に関する詳細は、CAJLE ニュースレター 31号をご参照ください。2006年度年次大会のための研究発表論文公募は昨年12月にニュースレターに同封して発送したお知らせに加え、ATJ ニュースレター、その他メーリングリストにて行いました。締め切りの4月末までにカナダ、アメリカ、日本、中国などから共同研究および共通テーマにおけるグループ発表を含め、計43本の応募がありました。審査の結果、26本が採用、3本が次点となりました。今年は例年になく、約4割が不採用という狭き門となりました。その後、1件辞退があり、次点から1本を採用としました。2007年度の研究発表論文公募も、例年同様、今年12月より行う予定です。

4. ジャーナルCAJLE (桶谷)

今年度は6本の投稿論文の内3本が掲載採用となり8月の大会時にジャーナル8号を会員参加者に配布した。尚、2007年に発行予定のジャーナル9号の論文投稿締め切り日は1月15日となっている。

5. ニュースレター (担当者楊代行杉本)

「2005年12月5日に第31号を従来通りハードコピーの形で発行した。

2006年6月22日会員へ電子メールでの発信、非会員並びに団体へはハードコピーの形でそれぞれ発行した。31号発送時に従来通りの形でニュースレターを受け取りたい会員は事務局(会計渡並)にその旨連絡するように通知したが、一通の要請もなかった。現在、ニュースレター編集部では33号の記事を募集している。

6. ホームページ (西島)

この一年、ホームページの作業は、行事報告やお知らせなど、情報のアップデートをすることを主な目的としてきた。研究発表やジャーナルへの投稿募集、年次大会の案内、研究発表要旨、そして大会の報告などを掲載してきた。また、年2回発行するニュースレターも、広く多くの方々に読んでいただけるよう、掲載している。今後の掲載事項についての要望や質問等、会員からの声を期待する。

7. OBC貸し出し状況報告 (鈴木)

この一年間は借用希望者皆無。一件、日本から参考資料として「言語環境調べ」P33-35のコピー希望があり、郵送にて応じたのみである。2002年4月、貸し出し開始以来、昨年度までの利用者総数10

ウェブサイト 「日本語メモ Nihongo Memo」 www.nihongomemo.com	
<ul style="list-style-type: none"> Home サイト内の各ページの内容一覧(目次) What's New カナダの日本語教師を対象とする各種プログラムの情報(日本での研修プログラム、教材寄贈プログラム、奨学金プログラム、資金援助プログラム、交換プログラム、など) Coming Events カナダ国内での日本語教育に関する各種行事の最新情報(研修会、学会、ワークショップ、講演会、各種公演、フェスティバル、など) ネットで年中行事 - Annual Events on the Internet 日本の伝統年中行事について、日本語教師や学習者が参考にすることができたり見て楽しむことができたりす 	<ul style="list-style-type: none"> るウェブサイトのリンクを行事ごとに紹介 Resources 室屋作成の研修会ハンドアウト、ワークシート、各種教材、など(ダウンロード用) PC Tips 日本語教師と日本語学習者のためのコンピューター利用ヒント集 Links 日本語教育に役立つ各種ウェブサイトへのリンク集 Sharing Resources 現場の先生方から提供された日本語教材やアイデアを共有するページ Useful Contacts 日本語教師に役立つ各種連絡先のリスト

名。

2. 2005年度会計報告及び2006-2007年予算案（中尾・渡並）

- ・2005年度会計報告が収支項目に沿って報告された。
- ・2006-2007年予算案が提出され、報告の承認と予算案が拍手で可決された。

・昨年2005年7月に新たにお願いした振興会公認会計士、リサ・ルー氏に代わり、今年度から、Mr. Rudy Chanにお願いすることになった。（中尾）これについて出席者一同拍手で承認可決された。

3 2005年度理事会決議事項報告及び承認： 桶谷議長による進行

1. 2005年度第2回理事会、理事の欠員補充で、オンライン理事会承認で竹井明美氏が就任したことに付き承認を得た。（報告及び承認）

2. CAJLEの事務所は6月30日付けで閉鎖した。CAJLEに付属する書籍、書類等倉庫に保管し、新事務所はメールボックスのみレントした。（報告）

振興会新住所（私書箱）：CAJLE P.O. Box 76133, 20 Bloor St. East, Toronto, Ontario M4W 1A0 CANADA

4 理事選出：2006年～2008年（桶谷議長により進行、出席者一同の承認を得て、可決）

桶谷仁美議長より旧理事、役員13名が紹介された。旧理事全員は推薦状を得ており、改選候補となった。この後、サマレル史子氏（欠席）、鈴木美知子氏、中尾良子氏、谷原公男氏4名が個人の事由に依り理事候補辞退を申し出て、出席者の承認を得た。新たに指名された被推薦理事候補7名を併せて16名は出席者一同の拍手を得て新理事として承認可決された。

(50音順位) 畔上ラム智子、王伸子、大江都、桶谷仁美、小室リー郁子、斉田恭子、清水道子、下條光明、杉本陽子、竹井明美、レベッカ・チャウ、渡並美和、永瀬治郎、西島美智子、楊曉捷、ライリー洋子。

年次大会（総会）後の移動報告及び状況

2006年度第1回理事会は、8月25日（金）年次総会后、6時15分より国際交流基金、日本文化センターを会場に行われた。出席者理事7名（王伸子、大江都、桶谷

仁美、清水道子、下條光明、杉本陽子、渡並美和）で新理事16名の過半数を満たさず総会承認事項に関する確認と、第2回理事会に向けて

新会長、新理事役割、ジャーナル、部会、OBCなど議題提案事項の報告がなされた。

2006年度第2回理事会オンライン承認事項（oct01.2006-nov24.2006）

1. 2006年～2008年会長、副会長は下記の通り決定した。（oct01.2006-2-1）

会長 大江都、副会長 王伸子、桶谷仁美、楊曉捷

2. 2006年～2008年 理事の役職分担は下記の通りに決まった。（oct17.2006-2-1-2）

書記 清水道子（チーフ）、畔上ラム智子 会計 渡並美和（チーフ） 広報 楊曉捷（チーフ）、西島美智子、杉本陽子、竹井明美、ライリー洋子 発表・企画 下條光明（チーフ）、レベッカ・チャウ ジャーナル編集 桶谷仁美（チーフ）、王伸子、大江都、小室リー郁子

3. オンラインCAJLE理事通信用メーリングリストの設置が理事の永瀬治郎氏のご提案、お骨折りにより開通することになった。（oct17.2006-2-3）

4. オンタリオ部会、アトランティック部会の位置付けについて（oct17.2006-2-4）

オンタリオ部会、アトランティック部会は基本的には理事会、理事とは直接関係ないものと考えられる。CAJLEの会員が自発的に、自由に参加出来、その地域でグループを構成して活動を行っていく。活動資金はCAJLE本部から出されるということはあるが、活動自体は理事会の小委員会とは全く異なるので、ジャーナルその他の理事小委員会部門の枠外に部会名を記すことに決まった。

5. CAJLE ホーム ページ の アドレス 変更（oct19.2006-2-5） www.cajle.net

6. 新会計担当者は下記の通りに決定した。（oct24.2006-2-1-6）

渡並美和（チーフ）、杉本陽子、竹井明美

7. 「宣伝・開発企画委員会」の準備活動発足の承認

(nov24.2006-2-7)

桶谷仁美氏の提案のもとに、かねて日本での宣伝開発に努められた王伸子氏と日本での広報担当を承諾された永瀬治郎氏、3名による「宣伝・開発企画委員会」の準備活動が承認された。2007年の大会での承認まで準備活動の形式をとる。

教材展示販売、懇親会など、充実したプログラムを予定しています。また、日本人には馴染みのある「赤毛のアン」の故郷、プリンスエドワード島への一泊ツアーも計画しています。詳しいプログラムについては、来春、お知らせいたします。どうか、お楽しみに。

お問い合わせ：西島美智子 (michiko@unb.ca)

これからの活動案内

2007年年度大会は、8月21日(火)～23日(木)に、ニューブランズウィック州のフレデリクトンにある、ニューブランズウィック大学で行う予定です。例年通り、研究論文発表、教師研修会、情報交換会、

文責：書記 清水道子

《会 員 規 定》

カナダ日本語教育振興会は、カナダにおける日本語教育の発展と向上を目指す非営利組織です。日本語教育に関心のある方ならどなたでも会員として登録することができます。

会費年度：2006年6月～2007年5月

年会費： 連絡先がカナダの場合…CAD\$40.00、アメリカ及び南アメリカの場合…US\$40.00
上記以外の場合…US\$60.00 (いずれも郵送の場合は小切手または money order で)

申込必要事項： 氏名 (日本語およびローマ字)、現住所、電話およびファックス (自宅、職場の両方)、電子メールアドレス、所属機関。

申込先： Canadian Association for Japanese Language Education (CAJLE)

P.O. Box 75133, 20 Bloor St. East, Toronto, Ontario, M4W 1A0, CANADA

お問い合わせ： E-mail: tonami@rogers.com (渡並)

(入会申込書は、ホームページをご覧ください。 <http://www.cajle.net>)

《年史》

2004年度 主な活動と内容 (2005年8月-2006年8月)

<p>2005年 8月 19日 -21日</p>	<p>2005年度年次大会(ビクトリア大学) 後援:国際交流基金、国立国語研究所、ビクトリア大学人文学部、 協賛:BC州日本語教育振興会 大会実行委員長:野呂博子(ビクトリア大学) 研究論文発表会(注1) 発表1-1 西島美智子司会、村上仁(香港城市大学)大江都(マウント・アリソン大学)発表1-2 サマレル史子司会、原田登美(甲南大学)太田陽子(早稲田大学大学院博士後期課程)平川八尋(東京工業大学留学生セ ンター) Makiko Hirakawa(東京国際大学) 発表1-3 パネルディスカッション 野呂博子司会、川口義一(早稲田大学) 清末逸子(外語ビジネス専門学校) Cody Poulton(ビクトリア大学) 発表1-4 英語セッション Joseph F. Kess, Tim Iles 司会、Kaori Kabata(University of Alberta) Yukiko Wada, Shoichi Yokoyama(国立国語研究所) Yuko Igarashi, Joseph F. Kess, Steve Calder(University of Victoria) 発表2-1 桶谷仁美・清水道子司会、サマレル史子(カル ガリー大学) 鈴木洋子(埼玉大学) 原澤伊都夫(静岡大学留学生センター) 発表2-2 スピーチ指導ワークショップ 中尾良子・鈴木美知子司会、矢澤理子(国際交流基金関西国際センター) 和泉元千春(国際交流基金関西国際センター)、 発表2-3 大江都・杉本陽子司会、楊曉捷(カルガリー大学)王伸子(専修大学) 発表2-4 フランス康子司会、松嶋緑(大 東文化大学別科研修課程)谷口龍子(国際基督教大学博士後期課程)崔廷珉(早稲田大学大学院日本語教育研究科博士課 程) 発表3-1 リディントンのぞみ・木村美香司会、亀川順代(同志社大学大学院文学研究科博士課程後期)畔上ラム 智子(レジャイナ大学)奥村訓代(高知大学)富阪容子・森川結花・永田雅子(甲南大学国際言語文化センター) 発表3-2 楊曉捷司会、浅野真紀子(サンフランシスコ州立大学)木下直子(明海大学総合教育センター)・戸田貴子(早稲田大学 大学)・Chris Sheppard(大東文化大学)上野善道(東京大学) 発表3-3 パネルディスカッション 野呂博子司会、 桶谷仁美(イースタンミシガン大学)村上陽子(グラッドストーン学園)森河内靖子(キラニー日本語クラス)ミッジ鮎川 (日系史研究家) 発表3-4 王伸子司会 西島美智子(ニューブランズウィック大学)公文素子(韓瑞大学校・韓国)井 上道雄(神戸山手大学)</p>
<p>22日 11月6日</p>	<p>基調講演 新納基久(バンクーバー日本語学校) 「バンクーバー日本語教育史散歩」 教師研修会 (1)柳澤好昭(国立国語研究所)「コンピュータ利用で日本語教育を再考」教師研修会(2)川口義一(早稲 田大学)「初級日本語教育における表現指導の課題-『会話』指導と『非会話』指導」教師研修会(3)王伸子(専修 大学)「日本語学習における日本事情講座の役割」教師研修会(4)原田哲夫(早稲田大学)「早期日本語教育におけ る発音習得とその発音教育への示唆」研修会(5)宇田川洋子(国際交流基金)「Activities and Strategies, Developing a sequential lesson plan」 2005年度定例総会(同大学 Clearihue Bldg. Rm. A127) 会員実数:160名 ・王伸子会長挨拶・2004年度部会活動 及び2005年度活動予定・2004年度会計報告承認及び2004年~2005年度予算案提出と承認。・改選なし。2004年度~ 2005年度現理事役員の紹介:(西島美知子議長)会長及びジャーナル 王伸子、副会長及びジャーナル 桶谷仁美、 書記及びオンタリオ部会 清水道子・鈴木美知子、会計及びオンタリオ部会 中尾良子・渡並美和、ジャーナル及び発 表企画 谷原公男、ニュースレター及びホームページ 楊曉捷、ニュースレター、ホームページ及びアトランティック 部会 西島美智子、ニュースレター及びオンタリオ部会 杉本陽子、ニュースレター サマレル清水史子、発表企画 金 谷武洋、2005年度大会企画 野呂博子、アトランティック部会 大江都 日本語教材展示及び販売(にほんごサークル) CAJLE 出版物展示及び即売(注2) (CAJLE)</p>
<p>12月5日 2006年</p>	<p>自由参加による日帰りビクトリアブッチャートガーデンパス ツアー企画担当:木村美香・Tim Iles ①調査プロジェクト「プラーチャレンジ説明会」講師 高田達(オンタリオ州立高校 School Guidance Counselor) CAJLE 主催 NJCA(注3) 協力 トロント日系文化会館 AJC コート ②日本語教師研修会 文法講座「初級から中級へ伸びる文法とその教え方」講師 谷原公男(ニューヨーク州立バッ ファロー大学)CAJLE 主催(注4) NJCA 協力 トロント日系文化会館 AJC コート ニュースレター31号発行 編集長 楊曉捷</p>
<p>3月18日 3月19日</p>	<p>「日本語弁論大会」 カナダ日本語教育振興会アトランティック部会主催 ニューブランズウィック大学 日本語教師研修会 文法講座「包んで癒す言葉・切って裁く言葉」講師 金谷武洋 「プラーチャレンジ説明会-その 後の経過報告」(注5)教育委員会でのオリエンテーション概要の説明</p>
<p>4月9日 5月28日</p>	<p>AJC コート NJCA 主催 CAJLE 協力 会場 トロント日系文化会館 継承日本語教育勉強会「家庭における子どもの読み書き能力育て-日本語学校の学習を効果的にサポートする方法を さぐる-」講師 鈴木美知子 CAJLE(注7)及びNJCA 共催 トロント日系文化会館 AJC コート 新移住者協会創立30周年記念座談会 トロント日系文化会館 AJC コート</p>
<p>6月22日</p>	<p>協会加盟日本語学校3校の卒業生6名、その保護者6名、教師5名を迎え トロントにおける継承日本語教育30年の 道程を来聴者14名と意見の交流を行った。継承日本語教育の将来を展望する企画として実施された。追って新移住者 協会創立30周年記念誌に収録される予定である。CAJLE オンタリオ部会としては、司会及び受けを協力した。 ニュースレター32号発行 編集長 楊曉捷</p>
<p>注1. 4教室、同時進行、2日に亘り、研究発表28点(発表者数34名)、パネルディスカッション2(参加者計7名)、ワークショップ1(ス ピーチ指導者2名)が開催された。ニュースレター31号又はwww.cajle.net 参照。注2. ジャーナルCAJLE 8号発行。注3. トロント移 住者協会日本語プロジェクト。注4. 11月6日①及び②カナダ日本語教育振興会オンタリオ部会主催。注5. 2006年、トロントボード主催 によるプラーチャレンジ申請及び資格授与プロセスの説明会は2月9日に EARL HAIG Secondary School にて開催された。英語名:PLAR (Prior Learning Assessment and Recognition)Challenge. 2006年、プラーチャレンジに関する詳細はCAJLE ニュースレター32号及び、 NJCA ニュースレター99号(2006年6月)参照(E-mail:sumida1@sympatico.ca)。注6. オンタリオ部会。 文責:清水道子、ラム(畔上)智子</p>	

BULLETIN BOARD

今年もあっという間に「師走」となりました。会員の皆さまは、それぞれの国、それぞれの職場で、忙しい日々を送られていることと思います。

2006年度大会は、谷原公男氏の報告にありますとおり、国際交流基金トロント日本文化センターにおいて開催されました。カナダ、日本から講師をお迎えし、例年よりは小規模ではありますが、なごやかでかつ充実した、学ぶことの多い会になりました。

この大会を機に、理事のメンバーが大きく入れ替わりました。六人の理事の方々が任を退き、代わりに七人の新しいメンバーが加わりました。CAJLEのために、長い間貢献して下さった旧理事六名の皆様、改めて、お礼を申し上げます。また、新しく理事メンバーとなられた皆様、早速に各部署において仕事を開始して下さり、心強い限りです。これからもどうぞ よろしくお願いいたします。

かく申し上げる私自身、この度の大会で、理事諸氏の推薦と励ましを受けて、会長の役を引き受けさせていただくことになりました。未だに「会長」のイメージと自分が結びつかずに困っておりますが、そんなことを言っている間も無く、オンライン理事会での白熱した意見交換が始まり、交通整理をするかのごとく、議事進行を司っております。

*** *** ***

さて、来年2007年は、CAJLEが初めて、アトランティック・カナダにおいて大会を開催する、画期的な年です。ニュー・ブランズウィック州の州都、フレデリクトンに所在するUNBが開催予定地です。ただ今、西島美智子氏率いる実行委員会が、着々と大会の準備を進めているところです。

アトランティック・カナダは、カナダ国内の会員の皆様にとっても、あまり馴染みのない地域かと思えます。広大な土地ときれいな空気、人口過疎で、日本からは地球半周ほどの距離ですが、そんな地域にも、日本語教育が進んでいます。

また、NB州は英仏二ヶ国語を公用語とする、カナダでも唯一のバイリンガルの州です。その特色を生かしての、英語での講演も大会の一部に企画されています。そのほか例年のごとく、カナダ国内、日本からも講師をお招きし、多彩なプログラムが予定されています。——そして、オプション・ツアーは、皆様ご存知「赤毛のアン」のプリンス・エドワード島です！

是非是非、たくさんの皆様にこの地を訪れていただき、また違った角度から、カナダでの日本語教育を見ていただければ、と思います。お誘い合わせの上、振るってご参加くださるよう、お待ちいたしております。

ではまずは、長い冬を前に、良い「年の締めくり」ができますように。そして、お元気で、新しい年をお迎えください。

会長：大江 都

編集部便り

★ 今年の五月王先生にお目にかかったのは20人のカルガリー大学の学生と一月間の留学を専修大学で楽しんでいた時のことでした。王先生から理事の役を勧められ、そのような責任のある役はとてもお受けできないとしきりに辞退したにもかかわらず、何時の間にか理事にされておりました。お昼をご馳走して戴いた時点でこうなるべき運命に気が付くべきでしたが、王先生のやさしい微笑みの罠にかかってしまった感無きにもあらずというところでした。しかしながら、理事会での各種のメールの意見交換、ニュースレターの校正などを通じて、わずか三ヶ月あまりでCAJLEのメンバーとしてお仲間に入れて戴けたというほのぼのとした気持ちになれました。理事の皆様、ニューズレター関係の皆様のおかげでうれしくまたありがたく感謝しております。未だ何をしてもよいかわからない新米理事ですが、今後ともよろしくお願いたします。(ライリー) ★ 今号からニュースレター編集の仕事をお手伝いすることになって、オンライン編集がいったいどのような段取りで進むのか大変興味深く思っていました。発行までこぎつけて全容が見えてきた時、とても嬉しかったです。原稿が入ってくる度に、編集長から仕事の流れやそれぞれの分担についての指示を受けたあと、各自担当部分に目を通してから、メール交信によって校正するという作業が何度も繰り返されました。地理的な隔たりなど何の支障にもならなかったのが不思議です。むしろ、編集会議で面と向かって相談するよりも、それぞれの空いた時間に冷静に取り組む方が能率的で、いいものができるのかもしれませんが。折しもバンクーバーは大雪で、しんと降りしきる雪を見ながらの仕事は、新米の私に一人前の編集者になったような気分を楽しませてくれました。「木を見て森を見ず」になりがちな仕事をじょうずに舵取りしてくださった編集長のリーダーシップとお骨折りに改めて敬服の意を表したいと思います。(竹井) ★ 今号から編集部に新しい仲間が加わっていただきました。怠け者の私と大違いで仕事が早く正確。なんとも頼もしいお仲間です。残念ながらサマレル女史は早期引退を宣言され冬眠に入られました。(失礼) / ついに「師走」。走り回らなければ新年を迎えられない時期がやってまいりました。「毎年の事なのだから、もう少し早くから準備をしていればこんな思いをしなくても……」これは毎年の反省です。ここ数年、日本での年末年始を過ごしていて、「やっぱり年越しは日本でなきゃ」という思いが強くなっています。新年を迎える準備に忙しく走り回るご近所、掛け声が一段と高く大きくなるお馴染みの商店街の人々の姿から、元気な新年を迎えられるという思いを強く感じます。元旦に向けて町や家々の周りが日一日ときれいに片付けられ、空が寒さと共に清く澄んでいく様子は、カナダでは味わった事ありません。「やっぱり日本人なんだな」、そして「やっぱり年越しは日本でなきゃ」。 / 今年も後10日ほどで、日本の何年末年始を過ぎに参ります。「楽しみ!!」皆様方もさぞお忙しい日々をお送りの事と存じます。よいお年をお迎えください。(杉本) ★ 秋季のクラスがすべて終わり、学期末試験やレポートの締め切りが済んでからの採点までのわずかな時間において、すでに遅れに遅れた年賀の準備などを気にしながらも、とにかくニュースレターの編集に集中しました。一ヶ月も前から集まってきた原稿に、編集部全員が繰り返し読み返し、丁寧に付け加えた色とりどりの添削をもとに、最終のレイアウトを掛けて、発行できるような形に変身させるという、一番達成感のある仕事でした。今度は大勢の新理事の寄稿もあって、あわせて16名に上る方々よりさまざまなテーマやスタイルの原稿をいただき、それぞれの寄稿者の顔を思い浮かべながら、内容豊かな原稿を読者より一足早く読ませていただけるという編集ならではの喜びを噛み締めながら、実りある週末を過ごしました。外は数日まえの厳しい気温からは30度近くも上がった暖かい日差しでした。あまりにも好天気に誘われるまま、編集の合間にクリスマス飾りのライトも取り付けしてきたことを付け加えておきましょう。このように仕上げたこの33号、新しい編集部一同の心のこもったクリスマスのプレゼントとして、皆様のお手元に届けられ、そしてお休み中の徒然の折に読まれますように。(楊)

研究発表論文募集

カナダ日本語教育振興会 (CAJLE) では、2007 年度年次大会を 8 月 21 日(火)~23 日(木)、ニューブランズウィック大学にて行う予定です。本大会では日本語教育や日本語学に関する研究論文発表および教師研修会、また週末にかけて希望者によるプリンスエドワード島への 1 泊旅行を計画しています。研究論文発表のテーマは日本語学、外国語習得および言語教育(日本語教育・第二言語教育・継承語教育)などに関する理論的考察や、実践報告、教材開発など、内容は未発表のものに限り、日本語による発表を原則とします。発表時間は質疑応答を含めて 30 分の予定です。またグループでの共通のテーマに沿った発表も歓迎します。発表をご希望の方は、以下を電子メールの添付ファイル (PDF または Word) にて下記アドレスまでお送り下さい (電子メール不具合の場合のみ FAX も可。)

(1) 発表タイトル(日本語および英語) (2) 発表論文の要旨(日本語 1 ページ) (3) 発表者の氏名(日本語およびローマ字) (4) 所属機関および役職(日本語または英語) (5) 電子メールアドレス、電話番号および郵便住所

締め切りは、**2007 年 4 月 15 日(必着)**です。採否は 5 月 15 日までに応募者に通知します。なお当振興会規定により発表は当会会員に限らせていただきますので、非会員の場合は採用が決定次第会員になっていただきます。入会方法などについては振興会ホームページ <http://www.cajle.net> をご覧下さい。

発表要旨送付先/問い合わせ先: ニューヨーク州立バッファロー大学 下條光明

電子メール: shimojo@buffalo.edu (タイトルを“CAJLE 2007”としてください)

ファックス: +1-716-645-3825 (カバーページを“Mitsuaki Shimojo / CAJLE 2007”としてください)